

前期

〔C類障害児教育教員養成課程 対象〕

国語
〔国語Ⅰ、国語Ⅱ〕

平成17年度
一般選抜前期日程
私費外国人
帰国子女

〔注意事項〕 解答はすべて別紙の解答用紙に記せ。解答用紙は三枚ある。
三枚のそれぞれに受験番号を記入せよ。〕

I 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

わたしは年をとって少々のことには驚かなくなっているが、今度のこれには大いに驚いた。六十年前、十八歳のわたしの岩波茂雄に出した手紙が見つかった、というのだから驚かないわけにはいかない。その知らせを伝えにきた岩波書店の編集者は、手紙のコピーも持ってきていて、たしかに当時の自分の字だ。巻紙に筆で書いたその昔の手紙を見て、何よりもまずわたしを襲ったのは、言いようのない羞恥^①の念だった。どんな恥ずかしいことが書いてあるんだろうと思った。

しかしおそろおそろ読んでみると、それは十八歳の少年が書いたにしてはずいぶんしつかりした、まともなコンガンの手紙である。昭和十八年、書物までが統制になって、自分の欲する岩波の本がどうにも入手できない。が、今度『三太郎の日記』が復刊されると知り、これまでが配給制のインチキによって手に入らないのではたまらない、ぜひどうか『三太郎の日記』をおゆずりください、伏してお願いたします、という内容のことが、下手ながらきちんとした字で書いてある。

編集者の話では、岩波茂雄宛の書簡の多くが書店内に保存されていた。創業九十年記念に未整理のまま保存されたそれらの手紙を調査、整理したところ、そのほとんどが岩波書店の出版の歴史に深い関りのある諸名家の書簡ばかりで、その中にたまたま十八歳の少年の手紙がまぎっていた、ということらしかった。

^(A) わたしは大いに恐縮した。あとで書簡集収録のリストを見れば、一九一四年から一九四六年にいたる長期間に岩波茂雄に寄せられたそれら書簡の差出人九十一人は、みなわたしが師として遠くから仰ぎ見ていた、恐るべき名士たちばかりである。夏目漱石、倉田百三、与謝野晶子から、鈴木大拙、羽仁五郎に至る人脈は、この国の近代文化を創り、担ってきた大変な人たちだ。大抵が一八〇〇年代の生れで、一九二五年生れのわたしはその中の最年少者である。その名簿の中に己れの名を見て、わたしは身のすくむ思いがした。

岩波茂雄はこんな無名の一書生の手紙を、どうしてそれら⁽¹⁾錚々たる名士の中にとっておいたのだろうと思った。^(B) そして数日考えてわたしの達した結論はこういうことだった。

『三太郎の日記』は、いわば岩波が中心になって築いた教養主義の象徴である。『出家とその弟子』や『善の研究』、『古寺巡礼』などとともに、河合栄治郎の『学生と生活』『学生と読書』の中で必読の書として挙げられているのが、阿部次郎『合本三太郎の日記』だ。それを何が何でも読みたいというこの若者は、この軍国主義、皇道主義の戦時下にあつても、なおその教養主義に熱烈に憧れる者の一人にちがいない。当然ながらこの若者は戦争に反対、軍人ぎらいの、西洋文化にシンズイしている者であろう。よし、その願いを叶えてやろう。

岩波茂雄はおそらくそんなふう判断して、十八歳の「貧書生」の手紙をスでずにとつておいたのではあるまいか、とわたしは推測した。なぜなら、事実わたしはそのとき高等学校に入ろうと勉強中の、まさしく岩波教養主義に熱い思いを寄せる受験生だつたからだ。

それでその返事は来たのですか、と訊かれたが、その記憶はなかった。が、わたしが『三太郎の日記』を手に入れたことは事実だから、岩波茂雄はそのように手配してくれたのだろう。無名の書生の願望を叶えてくれた岩波茂雄には、今思つても、感謝に堪えない。

それにしてもしかし六十年前の手紙である。よくぞまあこんなものがとつてあつたものだ、というのがわたしの一番のカンガイ^⑤だつた。当時のわたしの手紙など、これ以外に、どこにだつて存在しているわけがない。たまたま岩波茂雄という優れた出版人の目にとまつて、時代の一つの記録として保存されていたればこそ、六十年の歳月を経て日の下に甦^⑥つたのである。まさに奇蹟にも近いことが起こつたのだ。

こんなものが諸名家の手紙にまじつて公表されるのは、恥以外の何物でもないが、せつかく時代の一証言として保存しておいてくださった人の好意にむくいるためにも、わたしは公表を断ることはできなかつた。どんな手紙かは、その書簡集が出版されたとき、まだ興味があるならばご覧あれ。

しかしこのまつたく思いがけない昔の手紙の出現は、わたしに十八、十九、二十ごろの自分を、もう一度思い出させるよすが^②になつた。五時間ぐらいしか睡眠時間をとらない猛烈な受験勉強のあいだにも、どれほど熱い思いをもつて『三太郎の日記』を読

んだことか。『三太郎の日記』は青灰色の装幀^{まづらひ}で、四六判より小さな判型の、非常にぶ厚い本だったが、そのほとんどあらゆるページに赤線を引いて、高等学校に入れたらそのときこそ心ゆくまでこれを読み返そうと思いつつ暇を盗んでは覗いた^{のぞ}のであった。十八歳のわたしの小さな本棚には、河合栄治郎が『学生と読書』の巻末に教養のための必読書として挙げている本が少しずつ増えていたが、その中で『三太郎の日記』はカクベツ^⑦だった。

その本の中の空気そのものが、敗色の濃い昭和十八年の、空疎な軍国主義の時代への抵抗体であった。それはどんな軍人にも、皇道主義にも、日本精神主義にも、ノーと言っていた。それが憧れるのは西洋文化であり、それはわたしにとって具体的に岩波文庫の赤帯だった。が、当時は岩波文庫にも日本の古典が多く、赤帯は古本屋で高い値段を出さなければ手に入らなかった。

わたしは翌昭和十九年、熊本の第五高等学校への入学を果たして、五高生となった。熊本の上通りに古本屋が何軒もあり、着物に前掛け姿の無口でこわい親父が正座していたが、これが恐るべき物識りで、本のことなら何でも教えてくれた。その古本屋で岩波文庫の赤帯を手に入れ、寮の部屋に籠^こもって読みふけるのが、いやな時代の空気から逃れる唯一の時だった。敗色いよいよ濃厚な昭和十九年の状況では、自分たちがもう一、二年のうちに死ぬことは、确实、と覚悟せねばならなかった。

その年の夏、わたしは友人Sとともに熊本から超満員列車を乗りついで仙台まで、今生の別れにA^③という共通の友人を訪ねていった。そしてある晩、それが阿部次郎の面会日だと知っていたので、三人で予告もなく阿部邸に押しかけた。『三太郎の日記』は三人とも愛読し、阿部次郎は敬愛する師と思っていた。

二階の明るい和室に、背広を着た男と女性二、三人が先客としていて、我々はエタイ^⑧の知れぬ招かれざる客であった。阿部次郎は焦茶色の着物を着た、小柄でオダヤかそうな老人だった。わたしはその夜のことをのちに『麦熟るる日に』という小説に書いたが、我々のつきつめた思いに対し、阿部次郎は口数少なく、あまりはきはきした意見は述べなかった。そのころ特高(特別高等警察)がスパイを放つこともあったから、万一の用心として明確な意見を言わなかったのかもしれない。我々のほげしい物言いは、明かな厭戦^⑩、反戦であったから。

とにかく、しかしその晩の訪問の失望は大きかった。阿部次郎は、もうじき兵隊にとられてアメリカとの戦いに死ぬ覚悟をした若者に対し、あいまいな意見を口にするばかりだった。わたしにはそれが「あれもこれも」とあらゆる教養を身につけようという『三太郎の日記』の教養主義の限界と見えた。その人の反応に対する失望と不満が、自分のずっと憧れてきた教養主義そのものへの疑いをひき出したのだ。

熊本に帰って、Sは兵隊にとられ、わたしは学徒動員令で航空機工場で毎日働かされながら、この問題を思いつめ、結局、死とか戦争とか、飢えや奴隷状態といった、極度にネガティブな状況に対して、教養主義は無能であるという結論に達した。そしてあんなに愛読した『三太郎の日記』であつたけれども、上通りの古本屋に売ってしまった。昭和二十年五月の終り、わたしにも召集令状が来て、宇都宮連隊の二等兵になつた。

岩波茂雄が保存しておいたおかげで六十年後に日の目を見た、自分の十八歳の手紙を見て、わたしが思いだしたのはそんなことでもあつた。すべて茫々ぼうぼうと遠いはるかな昔の思い出である。今回書簡集に収録される九十一名の差出人のうち、今に生きているのはわたし一人である。どう考えてもわたし如き青二才4がお仲間に入れるメンバーではなく、自分自身そろそろ八十になるうという年齢になつても、この人々の名の中に自分を置くといまだ青二才の書生つばという気がする。

ともあれ、戦前①の高校生をおしなべて魅了し、憧れさせたあの教養主義は、一時代の日本を画する文化であつた。そして教養主義は岩波書店の名と密接に結びついていて、十八歳のわたしの手紙は、その最後の時代の一つの証言にはちがいない。

(中野孝次「十八歳の自分に逢う」より)

問一 傍線部①～⑩について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分は、その読みをひらがなで記せ。

問二 傍線部(1)～(4)の語句の意味を簡潔に記せ。

問三 傍線部ア・イの作品の作者名を左から選び記せ。

安倍能成

和辻哲郎

亀井勝一郎

西田幾多郎

小林秀雄

問四 傍線部(A)「わたしは大いに恐縮した」とあるが、それはなぜか。四十字以内(句読点等を含む)で説明せよ。

問五 傍線部(B)「そして数日考えてわたしの達した結論はこういうことだった」とあるが、その「結論」について七十字以内(句読点等を含む)にまとめて記せ。

問六 傍線部(C)『三太郎の日記』の教養主義の限界と見えた」とあるが、その「限界」とは何か。本文中の語を用いて二十五字以内(句読点等を含む)で簡潔に説明せよ。

問七 傍線部(D)「戦前の高校生をおしなべて魅了し、憧れさせたあの教養主義」とあるが、なぜ「魅了し、憧れさせた」のか。五十
字以内(句読点等を含む)で説明せよ。

II 次の文章は武女たけじよの日記である『庚子道の記』に、国学者の村田春海が付した序文である。これを読んで、後の問いに答えよ。

水上すみて流るる河も、落ちゆく末となりては、やうやうあらぬ塵あくたにけがれて、つひにもとの清き姿をうしなふ事あり。詞の道もまたかくのごとし。あがれる世の雅びやかなりし手ぶりも、あまたの年なみをわたりては、いつしかと里びたるならはしこそ多くは出で来にたれ。

彼かれいにしへは源なり。今は末なり。其の源にありては、求めずともおのづからにすみゆく流れに従はむ事はやすかるべきを、後にありてはあくたをはらひて、ことさらに清き瀬をたづぬるわざなれば、いとかたしともかたしや。

わが友清水浜臣のぬしは、詞の学に広く、文作る雅びに心深き人なるが、このごろ武女が道の記を得て、おのれに語らく。

「女房の日記といふもの、今の世にもやむ(1)ことなき殿のあたり、奥まりたる窓の内などよりもれ伝へたるに、心憎(2)きかたに人の思へるたぐひもこれかれあれど、よく見もてゆけば、これはしも取り出でていふべきは猶なほ少なし。しかるを此の道の記を見るに、いたくも書きけるかな。世のかいなでのたぐひにはあらず」といふを、返さひ読みて味はふれば、げにも詞の源をよく汲み知りて、清き水茎の跡をぞとどめ(a) たり。今このなずらひを言はむには、いにしへの女房のなかにこそ求む(b) べし。さるは蜻蛉(ア)、むらさき(イ)のにははしき筆(ウ)ずさみにも恥ぢず、また更科(ウ)、十六夜(エ)のあてなる口つきにもおとらぬは、いとこそめづらかなれ。

「そもそもいかなりし人のむすめぞ」と問ふに、「そは詳しくも知らねど、そのかみ寄るべなき露の世をかこちて、はかなき伏屋の月にうたへる浮かれ女の流れなりきとなむ聞き(c) っ は」といふ。さはいへ、葺むすに閉ぢられたらむあたりに、かくまでかぐはしき花はいかでか生ひ出でけむ。もしはもとの根ざし賤しからぬが、世にはふれたる玉淵がむすめのたぐひにはあらぬにや。

(『庚子道の記』序より)

(注) 詞の道―文芸の道。

清水浜臣―近世の国学者。

玉淵がむすめ―大江玉淵の娘で、遊女ながら宇多上皇に召されたという歌の名手。

問一 波線部(ア)「蜻蛉」・(エ)「十六夜」の読み方を現代仮名遣いで記せ。

問二 傍線部(2)「心憎き」・(4)「あてなる」・(5)「かこちて」の意味を記せ。

問三 波線部(イ)「むらさき」が指す作品名と、(ウ)「更科」が指す作品の作者名をそれぞれ漢字で記せ。

問四 の(a)・(b)・(c)の助動詞を、その箇所にあてはまる適切な活用形で記せ。

問五 傍線部(1)「やむごとなき殿のあたり」と対比的な表現を本文より二箇所、抜き出して記せ。

問六 傍線部(3)「これはしも取り出でていふべきは猶^{なほ}少し」を現代語訳せよ。

問七 傍線部(6)「かぐはしき花」は何のたとえになっているのか、説明せよ。

問八 二重傍線部「詞の道もまたかくのごとし」とは具体的にどのような内容を指すのか、八十字以内(句読点等を含む)で記せ。

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ(設問の都合上、送り仮名を省略した部分がある)。

司城子之圉人^{ぎよじん}之子^こ、食^{くら}鯀^い而^{シテ}死^ス。弗^ず哭^ク。司城子問^{ヒテ}之^ニ曰^{ハク}、「父^ト与^ト子有^ル愛^{カト}歟。」曰^ク、「何^ニ為^レ其^レ無^レ愛^也。」司城子曰^ク、「然^{シカラバ}則^{スナハチ}爾^{ナンヂ}之子死^{シテ}而^ル弗^ル哭^セ、何^{ゾヤト}也。」对^{ヘテ}曰^ク、「臣^{ケリ}聞^ク之^ヲ。死^ハ生^リ有^レ命^ニ、知^ル命^者不^ト苟^ニ死^セ。鯀^ハ毒^魚也。食^{ハバ}之^ヲ者^死、夫^レ人^莫不^レ知^也。而^{シカシテ}必^ズ食^{ヒテ}以^テ死^{スル}ハ、是^レ爲^ニ口^腹而^レ輕^ニ其^ノ生^ヲ、非^ニ人^子也。是^ヲ以^テ弗^ト哭^セ。」

(劉基『郁離子』より)

(注) 司城子——架空の人名。

圉人——主人の馬の世話をする者。

鯀——河豚。

哭——死者を悼んで大声で泣くこと。

問一 傍線部①「何^レ為^レ其^レ無^レ」^{カランヤト}「愛也」を、具体的な内容がわかるように、言葉を補って現代語訳せよ。

問二 傍線部②の「命」と同じ意味を持ち、「命」を含む漢字二字の熟語を記せ。

問三 傍線部③「夫^レ人莫^レ不^レ知也」の読み下しを、全てひらがなで記せ(現代仮名遣いを用いること)。

問四 傍線部④「非^{サル}人子^ニ也」の意味を簡潔に説明せよ。